

平成16年3月31日発行

狛江市和泉本町1-1-5

電話 (3430)1111

狛江の念仏講 I

同じ信仰上の目的をもつ者同士が参加する「講」とよばれる集まりは、地元から離れた山岳聖地や社寺への参拝を主な目的とする代参講と、念仏講や庚申講のように、その活動の場が村落の内に限られるものと大別できます。(代参講については、文化財ノート11「狛江の代参講」参照)

I 念仏講の意味と役割

念仏講は、「南無阿彌陀仏」の名号や諸仏の和讃を唱えるもので、狛江でも、かつては、すべての村に念仏講があり、念仏行事が行われていました。現在でも続いているのは、上小足立(西野川)の女性たちによる念仏講だけになっています。

念仏講には、主に年輩の女性たちで構成する「女念仏」と、男性のみで行う「男念仏」とがあり、また、男女まじっての念仏行事も行われていました。

女衆中心の念仏講が、信仰に加えて親睦を目的とする性格をもつのに対し、男衆中心の念仏講は、「講中」という形で、村落の組織の一部として機能していました。寺と檀家という関係とは一応、別個のものであり、地縁組織として弔いに重要な役割を果たした念仏講中は、葬儀のときに手伝いをしあう相互扶助の葬式組でもありました。葬式講中、穴掘り講中ともよばれるように、念仏講中は葬送の進行の段取りなど儀礼的な面に関わるほかに、葬送に際しての作業・協力の役割分担の単位ともなっていたのです。念仏を唱和して供養する念仏講は、葬式組の行事の一つとみることもできます。

このような性格をもつ念仏講への参加は、家々にとって当然のこととして受けとめられてきました。村落の中の暮らしでは、念仏講中に組み込まれることが、地域社会の一員としての一軒前でもあったのです。そして、女衆の念仏講は、「講中」を構成する家々の、主に年長の女性たちが講員となっている集まりでした。このような念仏講は、女の暮らしの大切なつきあいの場でもありました。結婚式のあと、この嫁さんも念仏講に入るのだからということで、祝いの座敷の最後の晩などに念仏講の人たちがよばれます。これからよろしくお願いしますという、顔合わせの意味も込められていました。

念仏行事の内容は、さまざまで、弔い念仏、月並念仏、彼岸の念仏、法事の念仏、それに家見念仏などもあります。

弔い念仏 昭和初年ごろまでは、葬家の庭にむしろを敷いて出棺前に、念仏講中の男たちが大数珠をまわしながら、百万遍の「お念仏を申した」もので、これを「庭念仏」といっていました(和泉・下講中)。出棺の際には、講中の者が鉦を3回叩いて知らせます。埋葬の際、土をかけながら唱える「穴端念仏」も男念仏が中心でした。

葬儀の日の夜、略式の初七日の法要が終わって、「七日の座敷」の食事の後に念仏をあげるのが、おおかたの習わしになっていました。この「七日の念仏」は、主に講中の男だけによるもので、この後に月並念仏の顔ぶれによる女念仏の「入り念仏」が行われたところもあります(猪方)。初七日の念仏には、「不動、釈迦…」ではじまる「十三仏」を唱えました。「入り念仏」とも「お立ち念仏」ともいわれる念仏では、「枕念仏」(馬鞍念仏とも)の「今日冥土へ旅立つ人は…」が多く唱和されたようです。初七日の念仏は、講中の男の音頭取りで、居合わせた男女共々、行うことも少なくありません。葬儀の夜の念仏は、弔いの形式が変わったあとも、昭和60年近くまで行われていたところもありました。

月並念仏 女念仏である月並念仏は、月に1回ずつ講仲間の家を順番にヤド(宿・会場)にして行われる「まわり念仏」です。戦前までは多くの地域でみられた念仏行事でしたが、いまでは、まったく行われていません。

月並といっても、毎月ではなく、夏場の農繁期には休み、師走とか、ところによっては寒の1月にも休みます。日取りは15日というところもありましたが、とくに決まった日ではなく、当番にあたった宿の都合のよい日に講を開きます。隣から隣へ触れを出して知らせることもありました。その日の夕方、子どもに鉦を叩かせたりもします。

集まるのは、主に年寄りですが、おつきあいなので、子どもをおぶい、おむつ持参で参加する主婦もありました。念仏講は8時ごろから始まり、家に帰ると11時や12時をまわっていることもあったそうです。音頭取りとか座配、先達などによばれる念仏上手の年寄りが正座に着き、大きい鉦を叩いて音頭をとります。そのほか小さい鉦が

二つ三つ、五つか六つというところもあったそうです。席は年齢の順でした。鉦にあわせながら、念仏や和讃を唱和し、時には百万遍の大数珠をまわすのが、よく見られるやり方でした。念仏が一通りすむと、「これさま」とか「はつせ」とよばれる祝い唄をうたって、お開きにするところもあります。この祝い唄は、結婚式などめでたい席で、よくうたわれていました。お念仏は、弔いの念仏とか、法事などの念仏が本番で、月並念仏は、そのための稽古の場と考えられていたようです。

宿の家では、せんべいや漬物などを出し、時には甘酒も出して接待します。秋になると、さつまいもが出ることも多く、「芋念仏」といわれもしました。世間話に花が咲くお茶のときが、念仏講に集まる人たちの楽しみの一つでした。娯楽の少ない時代には、念仏講の寄合いは、年寄りの楽しみな集まりの場で、男衆のように寄合う機会の多くない女衆にとって、月並念仏の場は、親睦と娯楽をも兼ねた機会でもあったのです。

彼岸念仏 春秋の彼岸には、入りの日、中日、明けの日などのいずれかに、女衆の念仏講による彼岸念仏があります。入り、中日、明けの三日とも、月並念仏のまわり持ちの宿などで行うところもありました。明けの日に、いまでも続けている上小足立の念仏講は、現在のように個人の家で行うようになる前には、共同墓地の入口にむしろを敷いて、念仏をあげていました。

故人の供養に、「お彼岸だから、お念仏お願いします」などと頼まれて、念仏講の人たちが出向いていく、「頼まれ念仏」もありました。

法事その他 故人の年忌法要、あるいは新盆の際には、念仏講の女たちによる念仏供養も行われました。施主の依頼によるもので、「頼み念仏」「頼まれ念仏」などとよばれています。

四十九日法要のときには、「四十九日」という題の念仏があったようで、忌日によって決まった念仏が唱えられたのです。「四十九日には、『善光寺さま』をやり、それから百万遍。お念仏のことを『善光寺さま』と言う人もいた」そうです。七年とか十三年の「年回念仏」などには、赤飯に煮しめ、まんじゅう等を用意して、念仏講の仲間にも念仏供養を頼んだものでした。女衆の出られない家では、男の年寄りが出ることもあり、また、大人の女手がないので、子どものころに「世間に出た」という人もいます。

「新盆念仏」も、新盆を迎える家から頼まれました。弔いの「七日の念仏」が、昭和60年ごろまで行われていたところでは、新盆の念仏もまた、同じころまであったようです。

家見念仏 新築の祝いに、「家見念仏」といって、念仏を唱えることもあります。新しい家に招待された念仏講の女衆が、お祝いの念仏をあげます。新築した家では、月並念仏の宿を引き受けて、月並念仏の日に祝うとか、都合のよい日をえらんで招待するとかして、家見念仏をあげてもらいました。昭和10年春、分家して嫁をもらった家では、その後まもなく、夫の本家の年寄りの肝いりで、念仏講の人たちを招待し、嫁の顔見せを兼ねて、新築祝いの家見念仏をあげてもらったそうです（上小足立）。

家見念仏は、家ほめ、福招きの、めでたいことばを連ねた念仏和讃の唱和が、中心になっていました。その一部を紹介しましょう。

さてもめでたいこのお家 鬼門を嫌って恵方を向く なかもにたてたる大黒は にっこり笑ってお立ちやる（中略）

かほど目出度いこのお家 末ははんじょうお目出度い（和泉・上南念仏講『おねんぶつ帖』より）

唱え言 念仏は、「南無阿弥陀仏」の六字詰からはじめ、念仏の文句の前には、「^{きみょうちやうらい}帰命 頂 礼」と唱えるものだと、年寄りから教えてもらったという人もあります。

念仏行事で唱える唱え言には、「南無阿弥陀仏」をさまざまな節で唱えるものと、和讃などのように七五調風に句を重ねた念仏和讃とがあります。よく行われていた百万遍念仏は、多人数が輪になって大きな数珠をまわしながら、阿弥陀の名号をひたすら唱えるもので、男衆が念仏をあげるときには、その多くが百万遍念仏でした。女念仏でも、多くの場合、百万遍を唱えますが、これ以外にもさまざまな唱え言がありました。それらの唱え言や節まわしをおぼえるのが、月並念仏の場でした。

念仏の唱え言は、本来、口伝えで受け継がれてきたものなので、その間に文字化する人がいたところでは、書きとめられた念仏集もできました。伝承されてきたものなので、文句の細部や節まわしには、当然異なるものもありますが、同じような内容の唱え言が、他の念仏講にも見られます。

（狛江市文化財専門委員 中島恵子）